

sento &
neighborhood
journal

HEIWAYU

せんとうと
まち新聞北区の
記憶あつめ編
Vol.12
平和湯

ABOUT

この事業は「北区政策提案
協働事業」として、一般社
団法人せんとうとまちが北
区と協働し、令和5年度か
ら3カ年計画で、北区の現
役銭湯全22軒(令和6年
現在)をめぐる。
銭湯と周辺のまちの歴史
や物語を聞き取り、広く共
有していくことで、多世代間
の交流を促し、地域のコミ
ュニティ再生へとつなげ
ることを目指しています。

CONTENTS 平和湯紹介/記憶地図/住民かく語りき



路地の奥に佇む姿が趣深い平和湯。

昭和の人情と情緒が漂う路地で
「人工ラジウム温泉」が
幅広い層のお客を癒す路地の先の
情緒に満ちた佇まい

東京メトロ南北線王子神
谷駅から徒歩7分のところ
にある「平和湯」。理容室
と美容室に挟まれた路地の
奥に立地し、高い煙突を構
える姿は今もなお下町情緒
を醸し出している。

創業者は石川県にルーツ
を持つ現店主の松本賢次
さんの祖父と父。賢次さん
の父は戦後、馬で荷運びを
していたが、三河島で材木
屋をやっていた親戚の縁で
銭湯を構えることに。その
後、世田谷に移転。70年ほ
ど前に現在の王子神谷の銭
湯と交換したという。「父
は8人兄弟の長男で、英城
出身の母は10人兄弟の長女
だったので、親族がとにかく
多い。大変な時期は母方
の弟や妹を呼び寄せて手
伝ってもらっていた。母は
親戚筋がやっていた品川の
銭湯で働いていた時に父を
紹介された」と聞いている
と賢次さん。ちなみに、賢
次さんは3人兄弟の次男坊
で、長男も他所で銭湯を営
んでいたが、現在も残って
いるのはこの平和湯のみだ
そうだ。

中普請(銭湯の業界用語
で内部の修繕工事のこと)
を経て、昔ながらの番台か
らフロントスタイルになっ
たのは1990年のこと。
また、洗いはサウナを加
え改装したものの、基本
的な構造は昔のまま。アー
チ状の高い天井が開放的
で、のびのびと湯船に浸か
り、癒しのひと時を過ごすこ
と

ができる。また、先代が選
んだというモザイクタイル
の絵柄もかわいらしく、
ちよつとメルヘンな気分
に浸ることもできる。

ちなみに、賢次さんと女
将の八重子さんはこの中普
請の6年後に結婚。ところ
が、ほどなくして賢次さん
の両親が次々と病に倒れた
こともあり、八重子さんは
慣れない銭湯仕事と介護
に追われ続けたという。そ
れでも「主人の叔母がフロ
ント業務を手伝ってくれた
り、長年脱衣場掃除を手
伝ってくれた方がいてくれ
たりと、周りの方々のお力
で何とか続けることがで
きた」と振り返る。

モザイクタイルで描かれた花畑を眺めながら
湯に浸かれる。こだわりの地下水と薪をして
「トゴール・ウォームタイト」

そんな平和湯では今も
地下水を新とガスで沸か
しており、銭湯の脇には薪
になる前の木製の建具や家
具が大量に積み上がってい
る。「以前は馴染みの解体
屋と工務店が良質な木材を
持つて来てくれていたが、
最近では減ってしまった。勝
手に廃材を置いて行く人や
業者が増えてきたし、なか
にはそれがプラスチック製
だったりに対応に困ること
がある」と言う。解体し
た廃材を短い薪にして燃や
すのも一苦労。特に夏は暑
さとの戦いになるそうだ。
さらに、木材の搬入にも
課題がある。トラックで木
材を運び込むための経路を
確保する必要があるから

だ。「近くの三角地が売り
に出て、建物ができるのと
トラックが入って来られな
くなるため、ローンを組み
土地と建物を一緒に購入し
なければならなかった」と
のこと。薪で沸かす湯は、
から温まる評判で、ガス
代の高騰の影響を受けにく
いという利点もあるが、薪
を使い続けるための苦労は
絶えないようだ。



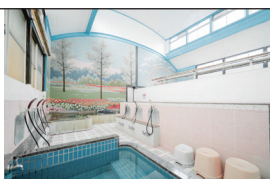
たゆまぬ努力で今も薪で湯を沸かしている。

もうひとつ、平和湯の名
物になっているのが「人工
ラジウム温泉」だ。「日本
三大ラジウム温泉」として
知られる新潟県新井温泉
付近の鉱石「トゴール・
ウォームタイト」を導入
し、地下水と掛け合わせる
ことで人工温泉を生み出し
ているのだ。この人工ラジ
ウム温泉は医薬部外品にも
承認されており、神経痛や
リウマチ、腰痛、肩こり、
しもやけ、あせもなどに効
能があるという。「義父が
がんになって、ケアホーム
の見学会に行った時に、ト
ゴール・ウォームタイトを
使った人工ラジウム温泉を
ウリにしていた、うちでも
『お客さんたちに喜んで
もらえるのではないかと』と
取り入れてみることにした
と八重子さん。利用者から
も「冬でも足先がいつも
も温かい」「血行が良くな
って、腰が楽になった」と
と評判で、最近では自転車
で来る人、バスで足立区か
ら来る人など多いという。
また、日替わりの薬湯も人
気だ。

古き良き銭湯の趣を残し
ながら、今の時代に対応す
るための工夫と努力を惜し
まない平和湯。だからこ
そ、地域内外の人たちから
熱烈な支持を集めている
のだろう。

せんとう情報 SENTO DATA

平和湯

平和湯 東京都北区神谷3-41-13 東京メトロ南北線「王子神谷駅」から徒歩7分
15:30-24:00 定休日:金曜(月1回連休あり)

フロント 温泉 薬湯 サウナ 水風呂 Wi-Fi(無料) ランドリー

※「記憶地図」は、一部ご近所の皆さまの記憶や思い出を元に作成しています。事実と異なる表記があるかもしれませんが、ご了承ください。

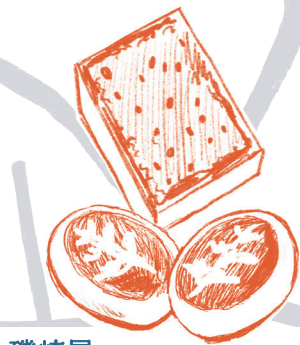
記憶地図

平和湯編

ワークショップや近隣住民の方へのインタビューを通して見えてきたまちの記憶地図。かつての銭湯界隈のあたたかいまちの風景を想像しながら、湯上りに歩いてみましょう！

平和湯

パーマ屋とバーバーに挟まれた路地の奥に佇む平和湯。江戸時代の旧道が通るこの界隈は昔ながらの温かい住人同士のふれあいが残る。平和湯の周りのくねくねとした細い路地にはかつてのにぎわいを感じさせるさまざまな痕跡が残っており、庚申塔や昔ながらの商店をたどりながら散歩するのも楽しい。

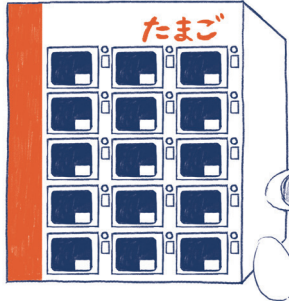


磯崎屋

和菓子にアイス、赤飯から葬式まんじゅうまで揃う磯崎屋。手土産に困ると磯崎屋に行く人が多いという。

●豆腐屋
●ラーメン屋

造花屋



卵の自販機

茨城の養鶏場から直送されてくる新鮮な卵の自販機があったそう。不思議と双子の卵が多かったとか。



提供:小林美代

小倉屋本店

もともとは北の方に住んでいたが、米屋を開業するためににぎわいのあるこの旧道沿いの地に出てきたそう。右の写真は、小倉屋本店の前に山のように米俵が積み重なっている様子。

お好み焼き屋

中華料理
乾物屋
煎餅屋
クリーニング

●中華料理
●乾物屋

魚屋

火の見櫓

量屋

クリーニング

文具屋

パーマ屋
バーバー
豆腐屋

ラーメン屋

魚鈴

三幸

八百屋

釣具屋

城北食品

さきイカ

魚鈴

三幸

八百屋

釣具屋

赤羽酒店

よろずや

茶屋

下駄屋

床屋

電気屋

タバコ屋

電氣屋

宮堀の渡

大正末期頃から1960年頃まで、隅田川を渡る際には宮堀の渡船場から渡し舟に乗って移動していた。毎月21日の西新井の大師参りで多くの人が利用するなど、橋の少ない時代にはこの地域の人々にとって欠かせない交通手段だった。

提供:北区飛鳥山博物館/倉田正義氏撮影

隅田川

住民かく語りき

平和湯周辺



Photo / Mari Okamoto

10月4日、記憶集めトークイベントが実施された。これは平和湯周辺のかつての写真や地図を見ながら地域の記憶を掘り起こしていくというもので、常連をはじめとした参加者に思い思いに語り合ってもらった。

まず話題に上がったのは平和湯界隈のかつての様子。何でもこの界隈には江戸時代、神谷地域の中心の道が通っていたという。そのため、庚申塔や古くからの商店が多く、「何をかうにも不自由なかつた」とのこと。また、かつては水路が多く、新神谷橋がなかった時には渡し舟があり、現在の富士見幼稚園の園長が船頭をしていたそう。男の子たちは泳いで渡ることが多かったそうだが、そのたが救出に向かっていたという。

当然、平和湯も連日混雑していた。昭和30年代に通っていた常連は「ひとと3人で2、3人で使っていた」「人が多すぎて、子どもは大人の手で抱かなくてはならなかった」と振り返る。また、当時は三助に洗濯や流しを20円くらいで頼めたこと、うれしそうに語る参加者もいた。そのほか、湯もみの板があり、「子どもの頃に滑り台にのって遊んでいた」といった話や、いつも酔っ払って洗い場で2時間くらいうつつ伏せて寝ていたおじさんがいたという話も。

その後、話題は先代と現店主の趣味の話にも及んだ。何でも、先代は趣味人で、マラソンはホノルルマラソンに参加するほど、歌はテレビに出演するほどだったとか。その影響で先代の女将さんとも大のカラオケ好きに。そのためかフロントはどことなくカラオケルームを彷彿とさせる。その遺子さんは現店主にもしっかりと受け継がれており、休みの日はもっぱら趣味の社交ダンスに没頭しているそう。

今回は久々に平和湯へ来たという近隣住民から90年以上通っているという常連、3世代にわたって通い詰める常連まで、幅広い層の人たちが集まり、歴史ある土地ならではの地域コミュニティの健在ぶりが感じられた。次回も参加者とともに、多くの記憶を集めていきたい。

平和湯に遊びに来てね！



変わる街並みと変わらない人情に囲まれて
—— 松本八重子さん(平和湯2代目女将) ——

私がここに嫁いで来た30年ほど前は、目の前の通りにまだ商店街の面影が残っていて、いろんなタイルのお店がありました。どの店がオススメか、うちの常連さんかなど、義母にいろいろと教えてもらいながら、用をすませていました。昔からの付き合いで、パーマ屋、布団屋、魚屋……と利用するところが決まっていたり。

うちの銭湯のことと言うと、当時はユニークなお客さんが多く、銭湯の仕事に慣れない私は時折、面食らっていました。全身の折青を見せつけるように腰にタオルを巻いただけの格好でロビーに出て牛乳をかう方、口癖のように「死ぬ時は死ぬからね」と言いながらお風呂に入る方など、いろんなお客さんがいました。そこまで風変わりなお客さんは減りましたが、今も常連さんに支えられていることに変わりはありません。

時代とともに街並みは変わりましたが、うちの母屋と煙突は昔と同じです。昔は住み込みのお姉さんたちや番頭さん、若い衆が母屋と一緒に暮らしていました。お姉さんは2階、若い衆は釜場の上の小部屋を使っていた。さすがに今は共同生活することはありませんが、手伝いに来てくれる人はいて、とても助かっています。街並みは変わっても、そういう人情は変わりませんね。

わたしのせんととうとまち

—— 北区の記憶あつめVol.12 平和湯 ——

活動支援の協賛・寄付を募集しています
<https://bio.site/sentotomachi>



発行：一般社団法人 せんととうとまち

制作統括：一般社団法人 せんととうとまち 栗生はるか 事務局：渡邊勢士 編集・執筆：熊本鷹一 グラフィック：株式会社 PIN DESIGN 菅原悠介/岡本茉莉

協力：東京都北区浴場組合、サム・ホールデン、細田卓志

北区政策提案協働事業「銭湯を核とした多世代間の地域コミュニティ再生と記憶アーカイブによる歴史的・文化的まちづくり」(担当：北区政策経営部シティブランディング戦略課)にて制作。

一般社団法人せんととうとまちは、銭湯とその周辺のまちを共に考え、関係性を編み直しながら、銭湯をめぐる生活文化を再生・活性化していくことを目指しています。